



簡易郵便局

黒川 聖



「ふたりおんなはるけん、よんによぬ  
っかごたる」  
来る人がみんなそう言う。

私の家は簡易郵便局。

これまで十三年間、妻はひとりでの  
簡易郵便局を支えて来た。簡易郵便  
局というのは「郵政事業の役務を辺  
な地方にまでひろめ、国民が簡便にこ  
れを利用できるように」ということ  
から、昭和二十四年に出来たもので、  
地方公共団体等（現在では一定の資格  
があれば個人でもよい）が受託者とな  
って、郵政大臣と契約を結び運営され  
る郵便局である。

だから、たいていの簡易郵便局は賑  
やかな町の中などにはない。文字どお  
り田舎のそれも町はずれ、村はずれの  
いわゆる辺びなところにしかない。煙  
草屋とか、酒屋とか、駄菓子屋だとか  
の商店の一角に同居している簡易郵便  
局もいくつもある。

そんな小っちゃな簡易郵便局も、最  
近は例の金融機関を襲う事件に巻きこ  
まれるようになり、昼間たったひとり  
の妻の簡易郵便局も気が足ではなくな  
った。

「おとうさんが一緒にいれば、わたし

も安心なんだがな……」  
あるとき妻が誰にもなくつぶや  
く。

私はかれこれ四十年、郵便局だけを  
歩いて来た。何の取り柄もなかった  
が、まず大過なく勤めて来た。華やか  
な舞台の裏の仕事ばかりであったか  
ら、自分の花道というのはおのずとよ  
く見えた。私はおもいきって退職し、  
妻の簡易郵便局を手伝うことにした。  
「なあんな、退職しなはったつか、ま  
あだ、そぎゃん齢じゃなかるに」  
来る人がそう言う。

「百貫電車のある頃から郵便局に出  
りました。日給一円五銭、田崎か  
ら小島まで電車賃は十銭だったです  
た」

「へえ、そぎゃん昔からな、そるば  
てん、ああたは若う見える」  
と、あらためて私の顔をながめる。

郵便局にはいろんな人が出入りす  
る。

「郵便局というところは、人生の永遠  
のノスタルジヤの存在である」  
と、高名な詩人がうたっている。私  
はその郵便局にしようとなつた四十  
十年のあしあとを、退職の記念に時折

りに書きためていた随筆集を「紙魚  
（しみ）のうた」と題して一冊の本に  
した。

出版記念パーティーの席である来賓  
の方が「簡易郵便局というのは知らな  
かった、これからはうまい詩を書いて  
ください」

と、私を励ましてくださった。  
すっかり調子に乗った私は大いに張  
りきり早速、原稿用紙をこたま買  
いこんでこどもたちに笑われる仕末。あ  
る日、ときには町へ出る余裕のできた  
妻は、いつまでも若さを保つようと  
と、エンジの丸首セーターを私に買  
て来た。

「ふたりおんなはるけん、よんによぬ  
っかばい」

この頃、来る人がみんなそう言う。  
簡易郵便局は、現在県内に百五十七  
局ある。（随筆家）

それは  
ほめの三段がまえではじまった

伴 征 子



「Oh, SEIKO GOOD, GOOD,」  
と誉めておらして、Please show me  
once more」と、やりなおしをさせ  
て、「much better,」と又誉める。  
これは私が去年の秋ロサンゼルスで  
一ヶ月間、毎日、朝と夕の二回受けた  
レッスン中、先生からシャワーのごと  
く浴びせられた「ホメの三段がまえ」  
である。それもアメリカ特有のあのオ  
ーバーなゼスチャーまじりです。

はじめてこの直撃を受けたときは、  
エッ、誰のことかと、わが耳を疑い、  
面喰い、照れて、恐縮の複雑骨折とな  
った。

しかしである。日頃、教師として教  
えのコツを心得ているものとして、今  
更言うのもおかしなものだが、やはり  
誉められるとうれしいものだ。胸のス  
ミッコに押し込まれ自分自身でも気付  
かなかった「私」が頭をもたげてきて  
「私」も捨てたもんじゃあなかバイ、よ  
し、思いきり私の実力ば先生にみても  
らおうと、上らぬ脚も一センチでも  
高く、飛ばないところも思いつきり……

……と、がんばった。  
一週、二週と教師と生徒のカケヒキ

の甲斐あって、みるみるうちに上達  
（?）。自信をもった鏡の中の私は、  
あちらさん並にイキキしてきたでは  
ないか。手足が長くバレエの条件を備  
えたアメリカ人のダンサーの中にあつ  
た「ザ・日本人」の私はコンプレクス  
のかたまりだったのに、そんなことは  
問題ではなくなった。

あちらで逢ったダンサーは皆「私  
は」というものをみせてくれた。それ  
はお粗末なテクニクしかもちあわせ  
ていない人でも「私」というものをち  
ゃんともっていた。

我々日本人は「まだお見せする程に  
は至っておりませんが……」と変に遠  
慮がちなところがある。アメリカの人  
は幼い頃、得意になって楽しく踊って  
いたのをそのまま大人になっても持ち  
続けていたところがある。それに  
「私はプロだ」という意識が立派だ。  
毎朝のレッスンはダンサーにとって必  
要欠くべからざるものだが、現役のパ  
リパリをはじめとしてメンバの多様  
さには、おどろかさされる。六十歳は  
るかに過ぎ小さくしぼんだ往年の花、  
今でも子供のクラスを教えているので  
自分自身のレッスンをかかさずピンク  
のレオタードをきて喜々として動いて

いる。又、赤ん坊を横の椅子において

一日でも早く元の身体に戻る様に汗し  
ている人。そして六ヶ月のお腹をかか  
えてジャンプは控えているもののギリ  
ギリまでレッスンはキープするとかん  
ばっている人などなど。

一人前のダンサーになるには本人の  
たゆまぬ努力と強い精神力が必要であ  
る事はいうまでもないが、それは自分  
自身の問題であつてレッスンはやはり  
あの「GOOD,」ではじまる「ホメの  
三段がまえ」でやっているというその  
かねあいがたいへん興味深い。

「私は熊本でバレエをやっているけど  
アメリカはどうかしら」と単純な発想  
で出かけたのだが、バレエをはじめた  
子供のときから、これは大事なことに  
思つて今までやってきたことが、実は  
何よりも一番大切なもので、これ以外  
はむしろなんでもないことであり、そ  
のなんでもないことを大いに楽しむの  
だという二つの点がアメリカに行った  
ことではっきりした。

わが愛するバレリーナの卵たちは、  
このところ一段と活気をおびている  
が、なにせ遠慮がちな日本人、どなた  
たり誉めたり、「ムチと飴」の「新ホ  
メの三段がまえ」となったこの頃であ  
る。（バレリーナ）